

Sand Play Technique の再検査信頼性

藤 井 し の ぶ

Retest Reliability of the Sand Play Technique

Shinobu Fujii

〈問 題〉

我国において箱庭療法が心理治療の場にとり入れられるようになって10余年が経つ。現在、学校や相談所、病院など広い範囲で箱庭は用いられており、心理療法のひとつとしてその普及はめざましいものと言えよう。箱庭という手法が日本人に受け入れられやすいという特性をもつこともひとつの要因であろうが、その治療の有用性が多くの臨床家に認められてきたことが普及への大きな推進力となっていると思われる。

箱庭療法の歴史は Lowenfeld に始まる。彼女は治療の場で、子どもたちの遊びの中から、一定の砂箱の中に玩具を置いて子どもにとってのひとつの“World”を作りあげていくという World Technique を確立していった。この World Technique から Bühler によって、World Test が作られた。砂の使用を止め、玩具数も制限して診断法としての性格を強めたものである。一方、ユング心理学の流れをくむ Kalff は World Technique の治療的側面をより強め、Sandspiel として自らの心理治療の場に積極的に導入していった。そして治療経験を重ね、理論的基盤をかためて、この技法がこどものみならず、成人の治療にも大きな役割を果たすことも明らかにしてきた。

Lowenfeld の World Technique がこのように2つの流れを生んだことに如実に示されているように、箱庭は治療的、診断的な二側面を兼ね備えた技法である。治療的側面から見れば絵画などと同じく芸術療法に属するものであり、診断的側面から見れば投影法のひとつと考えられる。箱庭療法が他の創造的な芸術療法と異なる点は、すでに用意された素材を用いての表現行為であるために、技量にあまり左右されず誰でも容易にとりくめることである。また絵画のように自ら描き出すという意味での深い表現とは異なるが、三次元的空間をうまく用いればクライアントの表現力に応じてかなり多彩な表現も可能となることも挙げられよう。

投影法として見た場合の特徴は他の技法に比べて意識的操作性が高く、「防衛的な作品を作ったり、内的なものに関連の少ないものをつくりやすい」（河合，1969）点が指摘される。そのためロールシャッハテストや TAT のようにパーソナリティの深い構造をおしはかるものとは自ずと違った側面を持つものと考えられる。河合はそうした側面をとらえて、箱庭は「夢の表現と似かよって『その時その人にとっての』問題となる面が出やすい」と述べている。ロールシャッハテストのように10枚のカードで次々に「見えたままにいくつでも」反応を重ねていったり、TAT のように31枚のカードへの反応を比較考量することによってはじめて全面的な人格診断は可能と

なる。箱庭は準備された玩具で、原則として一度作品を作るだけであるから、確かに箱庭によっては全面的な人格診断を求めることはできない。だが、箱庭には非言語性、表現性という特徴があり、治療にそのまま入っていけるという利点もある。たとえば西村（1969）のように緘黙症児に箱庭を用いて治療を進めていった過程には箱庭の特色がよく示されている。このような言語交流が期待できない事例では箱庭を通じてクライアントの心の世界を知っていくことが治療の流れを支えていく。この他にも遊戯療法やカウンセリングの治療事例で時々作られた箱庭にクライアントの心の動きが端的に示されている例は少なくない。この心の動き、内なる世界を知ることとはまさに診断と呼ぶべきもので、箱庭の治療的側面と診断的側面とは不可分なものである。

但し、箱庭に基く診断で忘れてはならないのは、箱庭には「その時、その人にとっての問題」、あるいは“*What the individual can actually do* (Dörken, 1952)”といった、その個人にとっての当面の問題が投影されているということである。ロールシャッハテストや TAT でカードを重ねて仮説を検証していくように、箱庭では回を重ねることによって仮説は確かめられていく。したがって1回の作品を投影法的に完全に利用するには自ずと無理がある。だが、治療の開始にあたっては初回の作品だけで、つまり当面の問題を手がかりにして、その中に集約的に示されているその人の人格のあり方を把まねばならない。他のいろいろな情報との相互検証がなされるべきであることはいうまでもないが、箱庭の投影的側面を活用して、クライアントはその問題をどのように受けとめようとしているのか、それにどのように対応しようとしているのか、彼の自我の発達にとってその問題がどのような意味を持っているのかを知ることが重要となる。このように箱庭の投影法的側面を頼りにする以上、Rosenzweig ら（1975）に従って再検査信頼性の検討をしておく必要があろう。だが箱庭は Rosenzweig の P-F Stady と比べるとスコアリング法が全くといってよい程未開発なので再検査信頼性の手続きも変更せざるを得ない。

箱庭を治療の中に生かしていく時、その初回作品が何らかの形で治療の方向を予測するものとしてとらえることは経験的にいわれており、初回作品には夢分析における初回夢同様の重要な意味が与えられている。しかし箱庭の中には様々なテーマが混在していることが多く、その中からクライアントにとって大きな意味をもつものを把みうるなら、それは治療の初期の方針を立てる上で治療者の助けとなろう。

この点に注目して、これまでの実証的研究はいろいろな被験者群による初回の作品を分析し、何らかの基準を求めて診断的手がかりを得ようとしてきたのである。しかしそうした分析によって得られた基準が果して持続的なものであるかについての再検査信頼性の検証はまだなされていない。もしそれらが1回限りしか現われないものとすれば基準としての意味も少なくなるし、それらが持続して現われる特徴であれば本人にとってより大きな意味をもつものと考えられよう。今後箱庭の研究をすすめるにあたって、まずこの点を検討しておくことは不可欠と思われる。

箱庭表現の展開としては、数々の事例報告において示されているように、大きな流れでとらえた場合、次第に初期の作品からはかなり異なった箱庭がつくられるようになる。このことは岩堂・木村（1972）の研究で、来談児が治療終結時に作った箱庭が極めて健康性の高いものと評定されたことから示唆されよう。箱庭表現はこのように変化しやすい面を持っており、それが治療的に大きな役割を果たしている。しかしその変化は決して「気まぐれ」なものではなく、人格の変化に対応したものである必要がある。ひとつの箱庭作品の中に表現された世界がもしその人にと

って何らかの意味を持つものであれば、そして箱庭表現にその人らしさがあるならば、それらは何らかの形で次の作品に持ちこされることは十分予測されよう。したがって短期間に同一の人が2度に亘って作った作品は見る人に同一人と判定可能な何かを含んでいることが期待される。このことを検討するために matching の方法が用いられる。Guinan & Hurley (1965) が人物画で、河田 (1976) が家族画でこの方法を用いており、スコアリング法等が未発達で全体的印象を重視する投影法の再検査信頼性を検討する有効な手段と思われる。

本研究の目的 箱庭の投影法的利用の基礎的研究として、matching を数量的分析によってその再検査信頼性を検討するのが本研究の目的である。まず matching によって、仮説①箱庭にはその人らしさが何らかの形で表現されているので、短期間に2度作られた箱庭は同一の人の作品であることが判定できる、仮説②箱庭を実際に使用している臨床家は未経験者より正確に matching できる、の2仮説を検討する。次に2回の作品を要因毎に数量的に分析し、再検査信頼性の高い要因を拾い出し、箱庭の投影法的利用に客観的な手掛りを与え、箱庭表現の何に注目すべきかを明らかにする。

〈方 法〉

I 箱庭作品の収集

1 被験者 小学生群, 6年生24名。中学生群, 1, 2年生19名。非行群, 教護施設収容中学1, 2, 3年生25名。情緒障害群, 情緒障害児治療施設収容の小学4, 5, 6年生20名。いずれも男子で計88名である。なお, 小学生群と中学生群を合わせて適応群, 非行群と情緒障害群を合わせて不適応群と称することにする。

適応群の生徒は特に問題行動を示さず, 学業成績も平均的であった。非行群の主訴は, 窃盗, 脅喝, 放浪などが主で概して知能指数は平均以下(集団式検査 IQ 70~90が半数)であったが, 精薄や神経症と診断される者は除いた。情緒障害群の主訴は登校拒否, 緘黙, 粗暴などの集団不適応症状が中心であった。著しく知能指数の低い者, 身体上の問題を持つ者は除いた。

2 用具 砂箱と玩具一式。砂箱はタテ57 cm, ヨコ72 cm, 深さ約7 cm で約3 cm の深さに湿った砂を入れた。玩具は箱庭治療によく使われるものの中から各カテゴリーに亘って選んだもので, 数量は約150個と治療時に使用する場合にくらべて大幅に限定した。玩具の種類について

TABLE 1 玩具カテゴリー

上位5カテゴリー		基本10カテゴリー
人	動物	普通の人 (例. 成人男女, 少年, 少女)
		闘う人 (例. 兵士, インディアン)
		草食動物 (例. キリン, ゾウ, シカ)
		猛獣 (例. ライオン, ワニ, ワシ)
動物	野生動物	水辺の動物 (例. 魚, カエル)
		家畜 (例. ウシ, ウマ, ニワトリ)
		建造物
		住宅 (例. 一戸建住宅, アパート)
人工物	建造物	その他の建物 (例. 城, 鳥居, ビル, 橋)
		乗物 (例. 自動車, 電車, 船)
		植物 (例. 樹木, 生垣, 芝生)

は Table 1 に示した。

3 手続き すべての検査で筆者がテスターを担当し、箱庭用具を備えた個室で個人検査法によった。各群とも1回目が終了した後、被験者には予告せずに、2～3週間の間隔をおいて2回目の箱庭を作成させた。教示は簡単に、「ここにある玩具と砂箱を使って何でも好きなように作ってみて下さい」とのみ与え、被験者の質問には作品内容に影響を及ぼさない程度に回答した。

4 記録 教示を与えてから作成にとりかかるまでの初発反応時間と、被験者ができ上がったと報告するまでの所要時間を測定した。制作過程で玩具の置き換えが見られたが、使用玩具数は完成作品によって決定した。なお作品は完成後写真で記録した。

II Matching

1 評定者 経験者群としては、箱庭を実際に治療の場で用いている臨床家で、経験年数は5～10年の者5名（男4名、女1名）が評定を行なった。未経験者群は、入門書程度の知識だけで臨床経験は全くない心理学専攻の大学院生5名（男4名、女1名）である。

2 Matching に用いた作品 収集した箱庭作品のうち、各群から5名ずつ計20名をランダムに抽出し、各々の1、2回目の作品の写真40枚を用いた。

3 教示 1回目の作品20枚、2回目の作品20枚の写真をそれぞれまとめて評定者に手渡し、「ここに同じ子どもによって2度にわたって作られた箱庭作品があります。同じ子どもによって作られたと思う作品を組み合わせして下さい」と教示した。

III 結果の処理

1 Matching 組み合わせの適中数を求めて有意性を検討し、経験者群と未経験者群の成績をT検定によって比較した。

2 作品の数量的分析

①時間 初発反応時間と所要時間について順位相関係数 ρ を求めた。1回目から2回目への変化は sign test によって検定した。

②使用玩具数 各群の使用玩具数について相関係数 r 、順位相関係数 ρ を求めた。1回目と2回目の比較は t 検定によって行なった。

③使用玩具の種類 Table 1 に示した基本10カテゴリーと上位5カテゴリーについて使用人数を求め、適応群、不適応群、全群の ϕ 相関を求めた。また使用頻度の高かった個々の玩具の中で治療過程で重要とされてきた10個の玩具（芝生、家、学校、柵、木、橋、馬、ライオン、城、鳥居）についても同様の手続きで検討した。

④砂の使用 各群の砂使用者数を求め、適応群、不適応群、全群について ϕ 相関を求めた。

3 検定方法

相関係数 r 、順位相関数 ρ の有意性は t 検定、相関係数 ϕ は χ^2 検定によった。matching では場合の数から直接確率を求めた。検定の結果は表中に示す場合次の記号を用いた。

*** ; $p < .001$, ** ; $.001 < p < .01$,

* ; $.01 < p < .05$, ° ; $.05 < p < .1$

〈結 果〉

I Matching

1 回目作品と 2 回目作品の matching 正答数を Table 2 に示した。経験者群では各人の適中数が 10, 9, 7, 7, 6, 計 39 であった。未経験者群では 6, 6, 6, 4, 3, 計 25 の正答数であった。この条件下で 6 組以上正答する確率は .001 以下である。両群の成績の比較の結果、 $p < .05$ で経験者群が有意に高い成績を示した。作品としては中学生群のものが適中しやすかったようである。

TABLE 2 MATCHING の正答数

	未経験者群	経験者群	計
小学生群	3	8	11
中学生群	13	11	24
非行群	4	10	14
情緒障害群	5	10	15
計	25	39	64

II 作品の数量的分析結果

①時間 各群の初発反応時間と所要時間の中間値及び相関係数は Table 3 に示した。非行群の初発反応時間に有意な相関がみられ、所要時間にも傾向が示された。情緒障害群でも所要時間に有意な相関があった。しかし適応二群にはいずれの時間についても有意な相関はなかった。

TABLE 3 初発反応時間と所要時間の中間値と相関係数

		小学生群	中学生群	非行群	情緒障害群
初発反応時間	1 回目	8	10	20	15
	2 回目	10.5	20	13	17
	ρ	.12	.08	.47*	.29
所要時間	1 回目	5'18"	6'33"	6'00"	11'40"
	2 回目	7'01"	8'05"	4'30"	12'24"
	ρ	.40	.18	.41°	.58*

各群について 1 回目から 2 回目への変化をみると、中学生群で初発反応時間、所要時間とも有意に長くなった ($p < .05$)。逆に非行群では初発反応時間が有意に短くなり ($p < .05$)、所要時間も短縮される傾向にあった。

②使用玩具数 使用玩具数の平均、標準偏差、相関係数 r 、順位相関係数 ρ を Table 4 に示した。小学生群、非行群、情緒障害群で有意な相関のあること、中学生群でも傾向があることが示された。しかし順位相関係数によると、不適応二群では極めて高い相関があるのに対し、適応二群では有意水準に達しなかった。

1 回目から 2 回目への変化は、非行群でのみ有意に使用玩具数が減少することが示された ($p < .05$)。

TABLE 4 使用玩具数の平均と相関係数

	1 回 目		2 回 目		相 関 係 数	
	$\bar{X}$	S D	$\bar{X}$	S D	r	ρ
小学生群	28.08	13.41	31.67	19.34	.44*	.34
中学生群	34.16	17.46	36.00	14.84	.42°	.25
非行群	21.40	12.48	17.80	11.04	.81***	.80***
情緒障害群	31.65	18.37	26.60	19.02	.69**	.67

③使用玩具の種類 各カテゴリーに属している玩具を使用した人数を求め、その相関係数を Table 5-a に示した。また使用頻度の高い10個の玩具使用者数についても同様に Table 5-b に示した。

 TABLE 5-a 玩具のカテゴリー毎の使用者数と ϕ 相関

		普 通 の 人	闘 う 人	草 食 動 物	猛 獣	水 辺 の 動 物	野 生 動 物	家 畜	動 物	住 宅	そ の 他 の 建 物	建 造 物	乗 物	人 工 物	植 物
		人	人	物	物	物	物	物	物	物	物	物	物	物	物
1 回 目	小学生群	6	11	16	11	5	13	10	15	12	13	14	8	14	22
	中学生群	13	1	14	6	4	6	10	11	16	18	18	15	18	17
	非行群	19	2	21	10	9	6	14	12	20	15	24	24	8	24
	情緒障害群	12	6	15	7	11	6	11	9	13	16	15	17	14	17
2 回 目	小学生群	8	10	17	13	12	8	14	9	14	14	17	18	10	21
	中学生群	8	3	10	7	7	4	7	10	13	13	14	14	8	19
	非行群	14	5	19	1	4	0	5	11	12	17	20	21	12	23
	情緒障害群	9	8	15	7	6	6	8	6	11	12	14	15	12	13
ϕ	適 応 群			.38*	.33*	.64***	.25°		.26°					.32*	
	不 適 応 群	.50***			.33*	.28°		.47**	.31*	.25°	.31*	.33*	.39**	.40**	.40**
	全 群	.36***	.18°	.30**	.32**	.48***	.19°	.31**	.27*	.27*	.24*	.22*	.34**	.26*	.37***

まず使用玩具カテゴリーについての相関を見ると、全群ではほぼ全部のカテゴリーにおいて相関のあることが示された。特に有意性の高いものとしては、「普通の人」、「水辺の動物」、「植物」のカテゴリーが挙げられる。適応群として有意な相関のあったカテゴリーは「人」、「猛獣」、「水辺の動物」、「乗物」であった。不適応群では「普通の人」、「猛獣」、「家畜」、「動物」、「その他の建物」、「建造物」、「乗物」、「人工物」、「植物」など多くのカテゴリーにわたって高い有意水準で相関が示された。

個々の使用玩具の相関について見ると、全群において「芝生」、「家」、「学校」、「橋」について高い有意性が見られた。動物の「馬」、「ライオン」、また権威のシンボルとされる「城」や宗教性を代表する「鳥居」などでは有意水準に達しなかった。また適応群について見ると「芝生」、「家」、「学校」、「橋」、不適応群では「学校」、「橋」が各々有意な相関を示した。

1回目から2回目への使用玩具の変化を見ると、小学生群では使用玩具に変化はみられず、中学生群で「乗物」、「学校」が減少し ($p < .05$)、「木」が増えたこと ($p < .05$) が示された。非

TABLE 5-b 個々の玩具の使用者数と ϕ 相関

		芝	学	家	柵	木	橋	馬	ライオン	城	鳥居
		生	校								
1 回 目	小学生群	6	8	8	8	12	6	10	8	4	7
	中学生群	9	14	14	11	11	7	4	1	6	7
	非行群	10	7	9	16	10	10	6	7	10	4
	情緒障害群	6	8	13	13	7	11	5	6	9	8
2 回 目	小学生群	5	10	5	9	15	3	7	11	3	5
	中学生群	10	11	7	13	17	7	6	6	1	5
	非行群	6	8	11	13	6	3	3	1	1	2
	情緒障害群	6	9	7	7	7	8	1	3	6	6
ϕ	適応群	.39*	.40**	.40**			.42**				
	不適応群			.38**			.30*				
	全群	.28**	.33**	.38***	.19°	.21°	.37***				

行群では「動物」が大きく減少したが ($p<.01$), その中で「猛獣」と「家畜」には変化はなかった。また個々の玩具のうち「橋」, 「ライオン」 ($p<.05$), 「城」 ($p<.01$) が減少した。情緒障害群では使用玩具カテゴリーに変化はなく, 「学校」の減少 ($p<.05$) と「柵」の減少傾向が見られた。

砂の使用は全体として少なく, 作品の中で砂を用いた者は全体の20%に満たない。しかし相関は極めて高く, とくに適応群で顕著であった。小学生群では5人までが底の見えるまで砂を掘って川や池, 海をつくった。中学生群では砂に触れる者は全くなかった。非行群でも砂を指先で掘る程度で小学生のような大胆な使用は見られず, 情緒障害群でも指先で境界線などを引くような躊躇いちな使用方法が目立った。

TABLE 6 砂使用者数と ϕ 相関

	1 回目	2 回目	再使用者	ϕ
小学生群	8	8	7	.85***
中学生群	0	0	0	.60***
非行群	7	3	2	.39*
情緒障害群	4	3	2	

〈考 察〉

matching の結果で正答率が有意水準に達したことは, 箱庭表現に何らかの「その人らしさ」が持続して反映されていることを示すものである。評定者は何を手がかりとしたかを殆ど言語化できなかったことは, 箱庭の見方が分化したものとはなっていないことを語っているようである。いわゆる全体的印象の水準で, 箱庭には各人に特有な何ものかが投影されていることは疑いえないであろう。しかしその適中率は, 最高点の評定者でもやっと50%に達するのみである。人物画において同様の手続きで20人の描画の matching を行なった Guinan & Hurley (1965) の結果

では、臨床家3人の判定は20, 20, 18の適中数であった。河田(1976)の家族画の研究でも20人中平均して17, 8枚の適中が報告されている。本研究の結果はこれらにくらべてはるかに適中率が低い。この原因として、描画法と箱庭の特性の違いからくる2つの点が考えられる。ひとつは、技術による影響の大きい描画にくらべて、準備された玩具を置くだけの箱庭は課題の遂行が容易で、技術とはあまり関係しない点である。もう一つは、人物画では「人」、家族画では「家族」という限定されたテーマがあるのに対し、箱庭は人はもちろん動物、植物、建物など広範にわたる玩具の用意がされており、子どもはそこから自由にテーマを決めて作品を構成することができ、しばしば一見がらりと変った作品となることが少なくない。実際、テーマが「街」を主体とするものに集中した中学生群では、経験者群、未経験者群とも高い適中数を示している。一方で、経験者群はその他の群でも相当に高い適中数を示し、ここに未経験者群との大きな差があった。箱庭が変化しやすいことは治療の利用においては利点となっていることは一般に認められている。それでもなお、箱庭の経験者には感取しうるような「その人らしさ」が持続的に作品の中に投影されているのである。

matching において、経験者群の適中率が有意に高く、経験の有効性が立証された。Guinan & Hurley (1965) の人物画 matching の結果でも人物画の経験を持つ臨床家の適中率が高いことが示されている。経験によって何が変化するかを明らかにするのは非常に重大な課題であるが、また困難な作業でもある。その点で山野(1973)のバウムテストの信頼性、妥当性研究の結果は興味深い。彼がバウムテストによる適応度判定で、経験者、未熟練者、未経験の学生を比較したところ、未熟練者が信頼性も妥当性も最も低かった。その理由として、学生は全体的印象と樹形の自然さに着目し、それが有効であったこと、未熟練者は解釈仮説にこだわって重要な点を見落とし、熟練者は全体的印象と診断仮説とを適当に組み合わせて用いた、の3点を挙げている。彼の研究は matching を用いたものではないが、本研究にあてはまるものを含んでいる。本研究では、未経験者も表面的な類似性の高い中学生群では高い適中率を示したことが、経験者ではテーマの変化も多かった他の群でも適中率がよかったこと、最も高い適中率を示した臨床家は「どのように変化しうるかに着目した」(内観報告)ことなどが経験の意味を解明する手がかりとなると思われる。経験者は言語的に明確には表現できないまでも総合的な仮説を持っているように思われる。つまり経験者は描画なり箱庭なりからひとつのまとまった人格像を想定して、作品の細部との相互検証を通じてよりまとまった人格像へと推量していくのであろう。そして2度目の箱庭ではどのような作品を作るかを行動予測的な作業をし、そこでも相互検証がなされる。つまり山野(1973)のいう全体的印象と診断仮説を適当に組み合わせるとはひとつのまとまった人格像を想定していく過程であると思われる。この過程は投影法解釈の最も本質的な部分であると思われるので、是非解明すべきところであるが、今のところ今後の研究を待たなければならない。

本研究は箱庭経験のある心理療法家と未経験の大学院生の比較であったが、経験の意味をより深く探るためには、play therapy などの治療経験はあっても箱庭は用いてない臨床家、他の投影法の経験の深い臨床家などが箱庭の matching でどのような成績を示すか研究してみる価値があろう。

matching において箱庭表現の global な側面の再検査信頼が認められたが、一方分析的諸側面においても興味深い結果が得られた。

時間、玩具数での相関の値をみると不適応群がより高い値を示している。小学生、中学生群では箱庭に接する時には、まさにその時々によって取り組み方が異なるのであろう。それに対し、不適応群ではそれぞれの子どもなりの一定のやり方がはっきり決っている。内的に何らかの問題を持つが故に一定の反応様式に囚われているのだろうか。使用玩具数でこの傾向がはっきりしており、特に非行群において、同じ様式に最も固執することが示された。再検査信頼性の観点からは全体的にみればあまり高くない信頼性が示されたことになる。だがこのように適応群と不適応群とでははっきりした差があるということは、*rididity* や逆に *creativity* などの要因を今後研究していく必要のあることを示唆している。

使用玩具をカテゴリー別にみると、全体として殆どの項目である程度の相関が認められ、「水辺の動物」、「普通の人」、「人」、「猛獣」、「家畜」、「動物」、「植物」などで特に高かった。全く相関が見られなかったものは「草食動物」であった。どのような種類の玩具を用いるかについてもおおそ信頼してよいと考えられる。そして ϕ の値の大きかったもの程、より特定の用いられ、低いものは状況によって変りやすい一時的なものと類別できよう。だがここでも適応群と不適応群で微妙な差があり、適応群でのみ有意な相関のあったのは「人」で、不適応群でのみ相関のあったのは「普通の人」、「家畜」、「人工物」、「植物」であった。ここでも不適応群の方が全体的にみると相関が高い。使用する玩具の範囲が限られているのであろうか。例えば非行群で「普通の人」のいる暖かい家庭場面を続けて表現する子どもが多く、一方で情緒障害群では「人工物」だけが立ち並ぶガランとした街を続けて表現する子どもも多かった。適応群ではこのような表現は他のものと取って替りやすいのに、不適応群で高い相関が示されたことは、これら用いられる玩具、それによって表現された世界に特有の意味が大きいといえよう。

個々の玩具では「学校」と「橋」が最も相関が高い。小中学生にとって生活の大きな部分を占める「学校」が箱庭表現の中でも重要な役割をもつことは理解に難くない。「橋」は箱庭という世界空間を統合していく上で重要な役割を果たすことが事例報告などでも強調されているが、そのことが実証されたといえよう。また、「芝生」と「家」は適応群でのみ相関が高い。この2つは箱庭表現の中で一緒に用いられることが多く、適応群で「庭のある落ち着いた家」のイメージが安定して表現されることを示している。一方この他の「馬」、「ライオン」、「城」、「鳥居」は全く相関がなかった。これらは「ライオン」を「トラ」に置き替えたり、「鳥居」を「寺」に変更したりというような象徴的等価物による表現が可能なこともその一因ではないかと思われる。このことから、*matching* の結果から示唆されたように「見え」にとらわれるのではなく、その玩具の内包する象徴性に目を向けることが重要であるといえよう。なお、カテゴリー別の玩具、個々の玩具とも1回目から2回目の間に微妙な変化もあり、解釈仮説との関連も深い。ここでは玩具は決して単なる「きまぐれ」のみで選ばれるのではなくそこに何らかの内的必然性が存在するということで結ぶが、各々の再検査信頼性について決定的なことを語るには、今後のより詳細な研究が必要とされよう。

砂の使用も全群でみると高い相関であった。Bowyer (1970) が砂の使用はロールシャッハテストのM反応の数と正の相関があり、健康度の目安となるという結果を示しているが、ここで砂の使用について高い信頼性が認められたことは、これを有効な診断上の手がかりとして用いることを裏づけるものである。但し、砂の使用にも程度や内容に差があるので、やはり多少の多義

性は免れ得ないようである。

箱庭表現について global な側面と分析的側面から様々な検討を行ったが、だいたいにおいて信頼性が認められたといえる。とくに不適応群は適応群にくらべて持続性が高く、やはり彼らの内的世界には何らかの問題が中核として存在し、二度に亘って箱庭を作ってもその子どもに特有の表現がなされると思われる。この点で興味深いのは、一見類似していて、matching でも適中数の最も高かった中学生群が数量的分析では相対的に相関が低かったことである。思春期にさしかかって内的には揺れを持ちながらも外的には適応しているという彼らの人格特徴を反映するのだろうか。この研究で対象とした各群はそれぞれに複雑に異なった心理機制を有すると思われるので、今後より被験者側の要因を考慮した研究が必要であろうし、他の被験者群による追試も不可欠と思われる。

箱庭は玩具と砂箱という手段を用いて何かを表現するものである。この研究では客観的な把握の行ない易い表現手段を主に対象として分析し、表現内容については直接的には関わらなかった。だが箱庭では、たとえば葛藤の存在を示すといわれる「闘い」のテーマでも動物の争い、戦争、また交通事故と様々の形で表現される。どのような表現手段でそれが現われるかも心の統合度との関係で大切であるが、どのような心的力動が存在するかはそれ以上に重要であろう。したがって、個々の玩具や玩具のカテゴリーで再検査信頼性を検討したのみでは不十分なことはいうまでもない。かといってひとつの箱庭作品全体を構成するテーマは非常に vari しやすいので、比較神話学で用いられる話素や話根の概念に対応するような、場面や背景を超えた「テーマ素」による研究が必要ではなかろうか。その「テーマ素」として何を取り上げるかに非常に困難は伴うであろうが、それは箱庭の妥当性とも深く係ってくる極めて重要な課題である。

〈引用文献〉

- Bowyer, R., 1970 The Lowenfeld World Technique. Pergamon Press, London.
 Dörken, H. Jr., 1953 The Mosaic Test: Review. Journal of Projective Techniques, 17, 287-296.
 Guinan, J. F. & Hurley, J. R., 1965 An investigation on the reliability of human figure drawings. Journal of Projective Techniques & Personality assessment, 29, 300-304.
 岩堂美知子・木村晴子 1972 箱庭療法に関する基礎的研究(その3) - 3・4・5歳児の箱庭 - 大阪市立大学家政学部紀要, 20, 175-184.
 河合隼雄編 1969 箱庭療法入門 誠信書房
 河田祐子 1976 家族画の信頼性に関する一研究 日本心理学会第40回大会発表論文集, 907-908.
 西村洲衛男 1969 事例6 緘黙症, 小学校3年女子, 河合隼雄編 箱庭療法入門, pp. 94-103.
 Rosenzweig, S., et al. 1975 Retest reliability of the Rosenzweig Picture-Frustration Study and similar semiprojective techniques. Journal of Personality Assessment, 39, 3-12.
 山野保 1973 変形した樹木画描写の心理 林勝造・一谷彊編著 バウムテストの臨床的研究 pp. 163-197.